虹彩異色の妖怪少女

A.H

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある男子高校生ハルは、ある雨の日に虹彩異色の不思議な少女に出会います。彼女の名前は「多々良小傘」れっきとした唐傘お化けである。そんな彼等の出会いから始まるお話です。

目　次

～プロローグ～ ―― 1
第１話　～腹を空かせた妖怪少女～ ―― 5
第２話～ひとりよりふたり～ ―― 9
第３話～嵐のような朝～ ―― 12
第４話～幻想郷～ ―― 16
第５話～唐傘お化け　外の世界へ～ ―― 19
第６話～唐傘コンプレックス～ ―― 26
第７話～成長の一歩は温かく～ ―― 31
第８話～頑固な老人と不器用な少年～ ―― 37
第９話～おあいこです！～ ―― 41
第１０話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦①～ ―― 45
第１１話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦②～ ―― 51
第１２話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦③～ ―― 58
第１３話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦④～ ―― 62
第１４話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦⑤～ ―― 67

～プロローグ～

「起きてください！旦那様!!」
彼女の大声で俺は叩き起こされた。
目覚まし時計を確認する間もなく俺の顔には眩しい光が
肌には冷たい風が吹き抜ける
馬鹿野郎、俺をいじめるな
まぁ冗談はさておきいつも通りの朝が始まった。
「うむ……おはよう、小傘」
まだ眠気は覚めてないが、そう俺は彼女に挨拶をする
「はい、おはようございます旦那様」
俺の敷布団の隣にちょこんと正座をしていた彼女は可愛らしい笑顔でそう挨拶を返してくれた
「朝ご飯もう出来てますから、顔洗ってから来てくださいね」
そう言うと彼女は立ち上がり、俺の部屋を出て階段を降りていった。
「ふぁぁあ……」
まだ眠いな…
多分目もちゃんと開いてない生まれたての哺乳類の赤ん坊みたいな顔をしてるんじゃないかと思う、そんな寝ぼけた面のまま俺は換気用に少し開いた窓を見る。
「…雨か…」
外では雨が屋根にぶつかるのがよくわかるほど大きな音を立てながら勢いよく降っていた。
俺は何故か彼女と出会ったある日を思い出した。
あの時もこんな雨の日だったな…

今から1ヶ月前
学校が終わり、家に帰る途中いきなり雨が降ってきたのだ。
「うわっ、マジか！」
天気予報を見ていなかったわけではない、ちゃんと見ていた

雨の予報なんて1ミリも言われてなかったんだ
もちろん傘は持っていなく俺は雨に打たれた。
「天気予報士の野郎…大きく的を外しやがって…」
まぁ、誰にも間違えはある、深く恨みはしなかった。
しかし、参ったな、とっとと帰ってしまえばいいのにこういう時、俺はなるべく雨を避けようとする変な意地が出てしまう。
止む様子のない雨の中何かの建物の古びた屋根の下で雨宿りをしている。
馬鹿な男だ、変な時間をかけて風邪をひくより、玉砕覚悟で雨の中を駆け抜けて家で風呂に入っちまった方が良いのに
「うーん…なんとかして雨をしのぎたいな…」
何か策はないかと辺りをキョロキョロと見渡す。
無いのかな…
「はぁ…」
諦めがつき、ため息を一つ
雨に濡れる覚悟で駆ける覚悟が出来たその時だった。
「……ケテ……」
え？
「タス……ケテ……」
たす……けて…？
確かにそう聞こえた、この豪雨の中ちゃんと聞き取れた。
古びた建物の裏側から聞こえた、というわけではないがそちらに向かう
そこには…
「……傘…？」
そう、傘が立て掛けられていたのだ
まぁ別に不思議なことではないのだが、声が聞こえた後にぽつんと傘が置いてあることに気づくと少し不気味に感じてしまう、ていうか傘も独特な色をしているのだ、敢えて言うならナス？、のような色をした傘なのだ。
まさかこの傘が……なんて考えてる場合じゃない

俺はそのナスみたいな傘を取り、差して雨をしのぎながら家に帰ることが出来た。
無事、俺は家にたどり着き、家に入った
傘は玄関に立て掛けておき急いで脱衣所に向かいフカフカのタオルでビショビショに濡れた髪と顔を拭いた
まぁ、どっちにしろびしょ濡れだったな…
制服を脱ぎ捨てて俺はそのまま風呂に入った。
「ふぅ……」
やはり、大雨を切り抜けた後の風呂は最高だぜ
俺は気分良さそうに微笑んだ
…さて、落ち着いたところで
あの傘についてだが、どうするべきであろうか
正直、まだ不気味と感じている
かと言って、帰宅中に俺が危険な目に遭うことはなかった
しかし、あの声は一体何だったのだろうか
俺は肩まで風呂に浸かり深く考えた。
捨てたほうがいいのだろうか…？
存在と色が不気味な傘、まぁ普通最初にそれを思い浮かべてしまうだろう…とは言うもの、俺はあの時聞いたのだ
タスケテ…と
こういったＳＦチックな事に対面するのは初めてだが、別に嫌な気分じゃない、少々不安ではあるが、俺はあの傘を家に置いておく事に決めた。
風呂を上がり、体を拭きバスタオルを腰に巻いて自分の着替えを取りに自室に向かった、そこで俺は普段着に着替えた。
そうだ、傘をちゃんとした所に掛けておこう
そう思った俺は傘を立て掛けておいた玄関へと向かった。
「あれ…？」
そこに傘は無かった。
おいおい、また怪奇現象かよ…
傘を探そうと玄関を後にし振り返った次の瞬間

「うらめしやぁぁぁぁ!!!」
「うわぁぁぁぁ!!!??」
何かに驚かされた俺はそのまま気絶してしまった。

第1話　～腹を空かせた妖怪少女～

「…ん……んぅ…」
あれ、なんで寝てるんだ俺…
頭痛に酔いながら立ち上がり俺は思い出し始める
えっと、なんだっけな…雨が降って…ナスみたいな傘を…
「ナスみたいな傘!!」
ナスみたいな傘という変なワードで俺ははっきり思い出した。
風呂上がりに、傘の置き場所を変えようと玄関に向かったら
傘がなくて…
そこまで思い出して俺は背後に何かいることに気づいた。
俺は恐る恐る振り向いた
「……え？」
そこには女の子がいた。
この展開からすると長ーい黒髪の色白な肌をした如何にもって感じの奴が来ると思ったのだが、そこにいたのは全体的に青い服装、青い髪の女の子だ。しかし、異質なところもある下駄を履いているのだ、さらにさっき俺が拾った傘まで持ってるじゃないか…てか、なんだアレ、なんか変にデコられてるように見える目とか口とか、そして…
彼女の瞳には引き込まれた…
漫画やアニメで言うところのオッドアイとでも言うのだろうか
右目は彼女の全体的な色と同じく綺麗な青い色、逆に左目は透き通るような紅い色をしている。
「だ、大丈夫ですか…？」
少女はやっと喋り出した。
しかも、心配してくれてるみたいだ。
「え？あぁ、大丈夫だよ」
まぁ驚かせて気絶させたのは君なんだけどね
でも、女の子にびっくりする俺って余程ビビりなのかな？
ちょっと自信なくしてしまった。

「ごめんなさい、私、お腹空いてて…」
お腹空いててうらめしや…？
ああ、うらめしやって飯が羨ましいって訴えてただけなのか？略し方なかなか無理矢理感あるなぁ……でもお腹空いてるのなら仕方ないな
「お腹空いてるんだね、良いよ何か作ってあげる」
「え？ええ、いや、あの…」
女の子は申し訳なさそうにあたふたしている。
「気にすんなって」
俺は台所に向かった、さて、何を作ろうか…
あんなに自信満々に言ったが大したものは作れない
「まぁ、なんとかなるか」
俺は得意な玉子とキャベツを使った料理と、炊いた白飯を女の子にご馳走した。
「さ、お食べ」
「あの…ありがとうございます…」
女の子は恥ずかしがり屋なのか、顔を赤くしながら礼を言った。
「どういたしまして」
自分の料理にお礼言ってくれるととても嬉しいものだ
「頂きます…」
どうかな…？
「美味しい…」
「お！やったぁ」
この料理は俺が超低価格で白飯を進ませるように編み出した料理だ。
これと白飯あれば何杯もいける自信がある、まぁ自分以外の人にも受け入れてもらって良かった…
女の子がもてなした料理を食べ終えると
「ご馳走様でした…美味しかったです」
女の子はとても可愛らしい笑顔でそう言ってくれた。
とても幸せな気分だった

「この度はご迷惑をおかけしました…その…私、人を驚かせてその驚いた心を食べる妖怪でして…」
…怪奇の類とは思ってたけど妖怪かぁ…本当にいるんだなぁ…
「なるほどね、それで俺を驚かせたのね…じゃあうらめしはガチの恨めしい方のうらめしやかぁ…」
「気絶までさせるつもりはなかったんです…ごめんなさい！」
女の子は少し泣きそうな顔で頭を深く下げてきた。
「大丈夫だって！そちらにも事情があるんだし」
「うぅ…ずみまぜん……あちきの所為で…」
やはり泣いてしまった、そして妙に一人称変わってる
まぁ、そこには突っ込まないようにしよう
さて、ここで俺はちゃんと聞かなければいけないことがあるのだ。
「ところで、あのナスみたいな傘の近くで助けを求めてたのって…君かい？」
「あぁ、えっと…傘がわちきです…」
聞いたことがある、例に言う付喪神って奴か
「なるほど、唐傘お化けって感じかな？」
「そう！それです！」
へぇ…こんな可愛い子が日本で有名な唐傘お化けなのかぁ……
「ていうか、あの…」
「ん？」
「普通妖怪って信じませんよね…それに、傘を拾ってくれた時もですよ、普通なら気の所為かぁ、とかになると思うんですけど…」
そうなんだよな、それが普通なんだよな…
「うん…ごめんね、やっぱ困ってる人といたら話聞いてあげたいし助けてあげたいしさ……昔から、そうなんだ人を疑えない性格だって…あはははは…」
「……」
黙り込んでしまった。
やはり、人は疑うべきなのだろうか…いや、人じゃねぇや妖怪だわ…いや、そこじゃねぇよ

「……感動です…」

え？

「こんなに良い人に拾ってもらえたなんて…この多々良小傘…とても幸せです…」

涙目になりながらも彼女は嬉しそうにそう答えた。

第2話～ひとりよりふたり～

多々良小傘……か…
「良い名前だね」
俺は素直にその名前を気に入った。
「ふふ、ありがとうございます。」
小傘は嬉しそうに微笑んだ
「そういえばさ、小傘は人の心を食べる妖怪なんだろ？普通の食事でも大丈夫なのかい？人間の食事とかさ」
もし、心以外のものを食べても腹が膨れていないのなら、無駄な時間を取らせたと謝罪したく、そう聞いてみた。
「いえ、人間の食事でも普通に満たされますよ、けれども私は驚かしてその心を食べるのに生き甲斐を感じてまして…えへへ」
ふむ、なるほど…
しかし見れば見るほど可愛い見た目をしている…
あの時は不意打ちでビビってしまったが、正体がわかってしまえばただ純粋に可愛いと感じてしまう、いや、不意打ちでも普通はビビらないくらい可愛いのでは？
「あ、そうだ、名乗るの忘れてたや、俺の名前はハル、好きに呼んでくれ」
ここで上の名前でなく下の名前だけ教えたのは、ただ可愛い女の子に下の名前で呼んでほしかっただけである
気持ち悪いね!!
「あの、そういえばご両親とかは…？もうお仕事とかから帰宅しても良い時間なのでは？」
「あぁ、もう居ないんだ」
「え…」
唖然とする小傘ちゃん
まぁ、当然な反応であろう
「色々あってね…居ないんだ」
小傘は何かマズイ事を聞いてしまったのでは、と少し俯く

あちゃあ…明るい話題につなげるのが下手だなぁ、俺…
「あの…ですね、一つお願いがあるんです。」
小傘ちゃんは顔を上げたが目は少し泳いでいる様子
「なんだい？」
「迷惑でなければでいいんですが…ハルさんのお家に住ませて頂くことは可能でしょうか!!」
あまりにも唐突である
「な、なんで??」
そりゃ俺も疑問になる
「その…変と思ってたのに私を拾ってくれたし…食事もご馳走して頂いたし…私としては恩返しがしたいんです！家賃は払います！家事もします！出来ることならなんでもしますから！」
ふむ、困ったな…
しかし…そうか
唐傘お化けは人に捨てられた傘に取り憑いた霊とかなんやら聞くしな…
家もなければ身寄りもないんだろうな…仕方ない
「わかった…それじゃあ、俺からもよろしく頼みます！」
俺は深々と頭を下げてお願いした。
「あわわ…私からお願いしたんですからハルさんはそこまで頭をお下げにならなくていいんですよ!?」
「いや…俺も寂しかったからありがたいよ…ありがとうね」
俺だって、こんな可愛い子が同居してくれるのなら感謝するし
寂しくなくなるもんだ。
「ふふん、このわちき多々良小傘にかかればどんな家事でもやり遂げます!!」
小傘ちゃんはとっても元気になった。
その様子を見て俺はホッとした。
「これからお願いしますね！旦那様！」
へ？
あれ、おかしいなそんなプレイだったかしら
?????

「あの!?小傘ちゃん!?なんで旦那様なのかな!?かな!?」
「そりゃあもう、わちきの自慢の旦那様ですから！」
エッヘン！と腕を組み誇らしげそうに言うのである。
君、今日が初対面じゃないか
ボケているのかガチなのかよく分からないが変わっている子であることには変わらないようだ
「じゃ、じゃあ俺は小傘って呼びますわ」
何をやっているんだ、俺は
「えへへ、よろしくお願いしますね！旦那様！」
「お、おう」
なんとまぁ、調子に乗りやすい子なのだか
「あ、あと時々で良いのでまた驚いてください！ご馳走になりますので！」
「食うな!!!!」
これから楽しくなりそうです。

第3話～嵐のような朝～

不思議なものだ
人というものはいつも一人だと慣れてしまい
寂しいという気持ちも薄れて顔を出さなくなるが
こうやって人が寄り添ってくれると嬉しく温かい気持ちになる…
当たり前のことかもしれないが、気持ちがはっきりする良い経験だ。
そんなことを思いながら俺は朝飯の支度をする。
「さて、あの子起こさなきゃな」
昨日、我が家に住むと言ってきた「多々良小傘」という少女
本人からは恩返しがしたくて住み着きたいだとか
まぁ、お互い一人ぼっちだ、俺も嬉しかったし無理に追い返すようなことはしなかった。
そんな小傘はここ何日間まともなところで眠ったり出来なかったのだろう、時計の針は9時だというのにまだ起きない
まぁ、俺も今日は休日だから寝坊してしまい8時半に起きたがね
「おーい、起きたかぁ」
昨日貸してあげた空き部屋のドアに3回ノックをする
……
返事がない
「入るぞ」
まだ寝ているのではとびっくりさせないようにゆっくりと部屋に入る
「……」
小傘はスヤスヤと眠っていた。
寝ているだけなら良いのだが、 ちょっとだらしない格好になっている。
貸してあげた寝間着は脱ぎかけていて下着が見えている。
おへそも丸出しなのだ、まぁ確かに男の寝間着なのだからブカブカなのは申し訳ないが、目のやり場に困る。

そしてもうひとつ
ここで起こしてしまうのは正解なのだろうか？
妖怪とはいえ仮にも女の子だ、ここで起こしてしまえば
「きゃーっ！えっちぃ！」
になりかねないのだ。
これから同居する身だ、いきなりトラブルにあいたくないのだ。
うん、そうだな
よし、起きるまでま……
「ん……」
しまった、起きたのか…!!?
一大事である
俺は慌てて彼女の意識がハッキリする前に
部屋を出ようとした、だが
グキッ
「ッ!!!?」
ああ、やってしまった
勢いよく部屋を出ようとすると人間はよくしてしまうものだ。
部屋の入り口の角に小指をぶつけてしまった。
「ッ……!!」
凄く痛い（小並感）
その場にうずくまる俺
苦しみながらも小傘の方を見ると女の子座りしながら目をこすっている
ああ、だめだぁ終わったぁ……
「旦那……様…？」
あ、やばい
「ご、ごめっ」
「おはようございます～」
「あれ？」
にっこりと笑顔で朝の挨拶をしてくれた
意外な返しだった

俺はホッとした…
この苦しい状態に死体蹴りのような行為が行われるのかとヒヤヒヤした。
「あ、ああ、おはよう小傘、よく眠れたかい？」
少し動揺しながらも俺は挨拶を返す。
「はい～お陰様でぐっすりと眠れました～」
小傘ちゃんはとてもご機嫌な様子
「ところで旦那様…？」
俺は再びゾッとした
「はひぃ…!?」
「どうしてそこに倒れていらっしゃるのですかぁ？」
「あ、えっと、小傘起こしに来た時に足の小指を角にぶつけちゃったみたいでさ…あはははは…」
「え！大丈夫ですか!?」
小傘は四つん這いのままこちらに寄ってきた。
「あ、いや…」
その体制はまずい
ブカブカの寝間着のせいでその姿勢だと胸の谷間が見えてしまうのだ
くそぉ…何気に大きいじゃねぇか…
あと顔が近いよぉ…
「旦那様!?顔も赤くないですか!?」
え、嘘、マジで？
「ああ、いや！大丈夫！大丈夫！俺結構元から赤いから！」
「えぇ？でも昨日はそんなに赤く」
「平気！平気だから！とりあえず小傘ちゃんは服をちゃんと着て！」
「ほえ？……あっ」
……あっ？…だと？
あれ、俺もしかして余計なこと言った…？
小傘ちゃん気づいてなかったの？もしかして……
「あ…」

小傘の顔も赤くなっていた
「きやぁぁぁぁ!!!!」
小傘は悲鳴を上げながら手元にあの例の傘を一瞬のうちに出した。
そして
ースペルカード・驚雨　・ゲリラ台風ー
俺には何が起きたか分からなかった。
辺りにバスケットボールくらいの大きさの弾幕（？）が多数現れ
勢いよく左から右にかけて流れるように飛んできたのだ。
「うわぁっ?!!!」
俺はあれに当たったら間違いなく無事では済まないと確信し
指の痛みなど忘れて部屋を飛び出した。
ドゴォォン!!
部屋からは轟音が鳴り響いた。
もしかして小傘ちゃんってヤバイ妖怪…？
俺は生唾をゴクリと飲んだ後部屋にゆっくりと入った。
部屋の中は、さっきの多数の弾幕によってめちゃくちゃになっていた
やはり、あれに当たれば死んでいたのかもしれない…
そばに置いてあったクローゼットの外側は大きく破損し、内側の衣類がちらほら見える
「こ、小傘ぁ……？」
恐る恐る彼女に声をかける
「え…あっ!!!」
小傘はやっちまった、みたいな顔をした。
「ご、ご、ごめんなさぁぁぁぁい……!!!!!」
小傘は大泣きしてしまった。

第４話～幻想郷～

昔から存在を聞かされる「妖怪」というもの
まぁ、目撃例が多いとは言われても証明できるものが無く
信じる方が変わり者だと思われがちな現代社会
そんな妖怪達、言い伝えの中ではどのような事をするのか
俺の知識だと詳しくは分からないが、人を食う妖怪、人間が仕事場で忙しくしている時に突然現れて帰るだけの妖怪、部屋の汚れを舐めるだけの妖怪とか、人を驚かせるだけの妖怪など種類は様々である。
では、この今言った妖怪の中で一番危険そうなのは？
無論、人を食う妖怪であろう
その他の妖怪は何というか危険性が無さそうであろう？
まぁ、人を驚かすというのは場所によっては危険かもしれないが
…とまぁ、そんな人を驚かすだけの妖怪と聞いていた小傘ちゃんなのだが…
「どういうことかな…？」
俺と小傘はちゃぶ台を挟んで向かい合う
「え…えぇっと…」
小傘は赤くなった自分の頬をポリポリと掻いている
小傘は可愛らしい少女の見た目をしている
だがさっきの出来事には冷や汗をかかされたのだ。
人を驚かすだけの妖怪にしては強くない？
クローゼットは砕け、天井には穴が空き、机は砕けて真っ二つ
殺傷能力高過ぎである
俺はひとまず聞いてみた
「小傘って、妖怪の中だと凄く強いんじゃ…」
妖怪基準だとアレがどのくらいの力なのか分からない
「私は…妖怪の中だと特に力がなく、その…弱いです…」
えぇ…（困惑）
アレで弱いとかなんですか…
「私の知っている妖怪の中には…山くらいなら簡単に消し飛ばす子と

かいますよ」
や、山？
そんなのテレビでニュースにならない方がおかしい
「じょ、冗談でしょ？そんな事起きたら普通テレビでニュースになるって…」
「私、ここの世界とは違う幻想郷というところから来まして…」
「幻想郷？」
名前からしてとても神秘的なイメージがつく
「あなたが住んでいるこの世界を幻想郷から言えば、外の世界と呼ばれています。幻想郷はこの世界からは空想のものと思われている妖精や神々、そして私みたいな妖怪などが棲んでいます。」
こいつは驚いた
この驚きが小傘の食料になったのかは分からないが
とにかく驚いた
「人間とかは…？」
「いますよ、共存してます。」
「ほえぇ…なるほど、さっきの話の山とかは幻想郷での…」
「はい！そういうことです！」
「なるほどなぁ…面白い世界だなぁ…」
小学生の頃だっただろうか
自分が理想とする世界を作文にまとめろというものがあった
俺は空想物の存在がしっかり確認されている不思議な世界に憧れていた。
そのような世界が実際にあると聞くとロマン溢れるな…
「その世界は俺にも行けるのか？」
「行けますよ」
「おお！」
「最も簡単に行く方法は死ぬか山とかで運良く入り口を見つけ出すとか」
なるほど、全然容易じゃなかった
その他には伝説級の偉人にまで上り詰めたり

この科学世界で魔法使いになることだったり
「難しいね…」
「そ、そうですね…」
あぁ、悔しいなぁ俺も行ってみたかったなぁ
「ん？そういえば小傘はどうしてこの世界に？」
俺はふと疑問に思っていた事を聞いた。
「そ、それがぁ……」
「ん？」
「お昼寝してたらいつの間にかこの世界に…」
「えぇ？」
どうやら小傘も不思議なことにまきこまれていたらしい

第5話～唐傘お化け　外の世界へ～

その日は天気が良く、人を驚かす気分でもなかったそうな
どうして天気が良い日に驚かす気分にならないのか
それは彼女が晴れの日を嫌うからだ
別に天気そのものを嫌ってるわけじゃない
なぜかと言えば晴れの日に傘をさしてたら馬鹿にされるからだと
そんなデリケートな心の持ち主である小傘は相棒であるナスみたいな傘はささずに木陰で昼寝をしていた。
「ちぇ、どうしてお花畑の妖怪さんや、スキマの妖怪さんは傘をさしてもバカにされないのにわちきだけ馬鹿にされるのよ…」
彼女以外にも晴れの日に傘をさす妖怪が何人かいるのだがその中で小傘だけあれこれ言われるのが不満らしい。
「そんなにこの傘変かなぁ、可愛いと思うのに…」
晴れの日には外で妖精や妖怪の子供が遊ぶためお出かけ中の小傘を見つけては彼女の傘をからかってくるんだとか
そのため、小傘は雨が降り外で遊ぶ子が見当たらなくなってから人を驚かしに出かけるという習慣を繰り返していた。
しかし昔はそんな習慣はなかったと彼女は言った
最近馬鹿にされるのが嫌になりこのような習慣がついたらしい
彼女なりの思春期だろうか？
そんな彼女は晴れの日という暇を持て余し昼寝をしていたのだ。
「もういいや、寝よ…」
その一言を最後に彼女はこっちの世界にやってきたらしい。
目を覚ました時、彼女は薄暗い路地裏に居たらしい
辺り一面にカビ臭さとホコリが目立つ
彼女はとりあえず光が目立つ方向に歩いた、寝起きの重い体で一歩ずつ目を凝らしながら歩く、そしてその先に広がっていたのは
見慣れない衣服をまとった人間達と見かけない造りをした家々だった。
その光景に唖然としたが、しばらく考えてわかった

「もしかして外の世界…？　」
どっからどう見ても科学の発展に特化している乗り物や小道具が見え
彼女にはそうとしか考えられなかった。
でもどうして？　と彼女は考える
幻想郷側に突如として引き込まれる事例は聞いたことあるが、外の世界にいきなり飛ばされる事例は彼女にとっては聞いたことのない話だった。
「うそぉ…こんなことってあるの…？」
未だに謎が多い幻想郷、何が起こるかわからない世界ではあるが、彼女としてはかなり恐怖の体験である
緊張と恐怖からか震えが止まらない
人に助けを求めたいが、話しかける勇気もないし話しかけたとしても小馬鹿にされる程度であろう。
彼女は仕方がなく、あの薄暗い路地裏の方面へと進んでいき、元いた場所よりさらに奥に進んだ。
すると
「わぁ…」
そこには古く所々が傷んだ小屋が建っていた
隅々にまで墨のような汚れが行き渡り、カビ臭さもあり決して良いところとは言えないであろう
だが、その古臭さが逆に彼女を安心させたのだ。
自分が元いた世界と全く異なる文化を見せつけられ何もわからない恐怖に怖気付いた彼女にとってはその古臭さが恋しかったのだ。
その小屋に背を預けてその場に座り込んだ。
頭を伏せて脚を腕で囲んで丸くなる
「はぁ……」
彼女からため息が漏れる
幻想郷から外の世界に放り出されたのは自分の所為なのでは？
など悪い方に考えてしまう
そんな自分に負けないように彼女は頭を横に振り自分を激励する

「ううん！わちきは負けないもん！何としてでも戻るもん！」
そう自分に言い聞かせ、顔を上げた彼女には勇気が身についた。
「でもぉ…」
ぐぅ～っと彼女の腹が鳴る
「お腹空いたなぁ…」
ここ最近人を驚かせず、ロクな食事をしていなかった彼女には辛い空腹であった。
腹を空かせて憂鬱な気分の彼女
そんな彼女の頭にポツリと何か落ちてきた。
「ん？」
それはザーッと沢山降り注いできた
そう、雨だ
「今降られてもなぁ…」
彼女の驚かし日和である雨であるが、ここは生憎の外の世界
ここの住民たちの反応もどう来るか分からないし変な事になったら大変だ
この世界では迂闊には動けなかった。
「神様仏様～…わちきにお恵みを～…」
もうここまで来たら神頼みだ
幻想郷と違ってそういう力は弱まってるかもしれないが
今彼女の頼りになるのはこれしかないのだ。
すると、彼女の想いが通じたのか
ピチャピチャ
この雨の中を走る足音が聞こえる
次第にその音は近くなり
そして
「…止まった…？」
この古びた小屋の前でその足音はピタリと止まったのだ
恐らく雨宿り、つまり傘を持っていない
これはチャンスだ、恐らく人間であろうその足音の主を驚かせば腹が満たされる、良いことに周りでは人の声や足音は聞こえずその人間

しかいないようだ。この者に拾われれば…
「よ、よぉ～し…」
生唾をゴクリ、彼女は覚悟を決め
「助けて!!」
彼女は大きな声でそう叫んだ。
このＳＯＳには二つの意味がある
第１に彼女は腹を満たしたく、その獲物を引き寄せるため
そして第２は…
ただ…助けて欲しかったのだ。
この何もわからない世界、誰かに助けを求めたかった。
驚かしてしまえば嫌われるかもしれない、だが
助けて欲しいのだ。
ひとまず拾ってもらい腹を満たして事情を話す。
この人に拾って欲しい、助けて欲しい…
彼女はその気持ちをもう一度声にした。
「助けて!!!」
この雨の音に負けないくらい大きな声でそう叫んだ
そうすると
ピチャリピチャリとこちら側に足音が聞こえるではないか
やった…うまくいった！
彼女はすぐに傘に化けその人間を待ち構えた
……
しかし、本当に拾ってくれるのだろうか
みんなからナスのようなだとか変な色だとか
さらには不気味などと言われ続けた彼女
足音が近づくにつれて気持ちが焦りだす
拾われなかったらどうしよう！このまま放っておかれちゃう！
捨てられちゃう！
そんな焦りも心の準備をする事も今では無駄だ
もう来てしまった。
「……」

そこにいたのは一人の少年だった。
学生服の格好に端麗でとは言わないがそこそこな顔立ち
そして予測通り傘は持たず、ずぶ濡れだった。
少年は彼女が化けた傘の存在に気付いた
「傘…？」
少年はまじまじと彼女を見つめる
緊張と焦りで変化が解けてしまいそうだ
彼女は必死にこらえた。
すると
少年は彼女を拾い上げそれをさし駆け出した
やった…!!
彼女の作戦は成功したのだ、派手に喜びたいが
その気持ちは抑えて少年の帰宅後を狙う
数分後、彼の自宅に着いたようだ。
その家は二階建てで和を意識した造りをした家だった。
少年は急いでその家の中に入り、彼女を玄関に置き、脱衣所に向かう
彼女はその隙を見てすぐ隣の和室に隠れる
「あの人…お風呂に入ったのかな？」
彼女は息を潜めて待ち、少年が入浴を終えたタイミングを狙う
約１５分後
少年は入浴を終え脱衣所から出てきた。
よし！いま…はっ!?
少年はタオルを一枚下半身に巻いただけの格好だった。
この状態の少年を驚かして、もしタオルが取れてしまったら…
だめだめだめ／／／／／／…！
彼女は慌てて定位置に戻り息を潜めた。
少年は階段を登り服を取りに二階に向かったようだ
彼女も向かおうとするが、バレては満足に驚いた心を食べれないと思いじっと待った。
しばらくすると少年は階段を降りてそのまま玄関に向かった。

すると、少年は玄関に置いてあった傘がなくなったことに気付いたようだ。
今なら彼の背後から驚かせる…
だが、ここまで来てアレなのだが彼女は驚かすのが下手だ。
彼女はそれを心配して少し足が竦む
「ふぅ…わちきならいける…いける…」
彼女はまた自分を激励した。
「よし…！」
彼女は覚悟を決め少年の背後に忍び寄る
空腹に耐えて耐えて耐えしのいだこの気持ち
ココで今、全てぶつける！
「
」
ドゴォォォォン
「……？
！」
彼女は今、渾身の力で驚かしたのだが突如として鳴り響いた轟音に声が掻き消されてしまった。
今のは…雷？
そう、雷の音だったのだ
彼女のお決まりの「うらめしや」の渾身の一声は自然の猛威によって掻き消されてしまったのだ。
勢いで目を瞑ったまま驚かしに行った彼女は目を開けるのが怖くなった
怒られたらどうしよう…
小傘はビクビクしながらもゆっくり目を開けた
するとそこには
「…ほえ？」
なんとあの少年が仰向けに倒れていたのだ。
そして、彼女は自分の腹も満たされていることに気づいた
つまりこれは
「成功…？」

形どうあれ雷のお陰で迫力が増したようだ
久々の食事にありつけた彼女は飛び跳ねたいほど喜びたいはずなのだが
「あわわ…どうしよう…」
どうやら少年の心配をしているようだ。
「驚かしたのはわちきだけど…助けてくれたのはこの人なのに…でもお腹空いてて…あうぅ…ごめんなさぁぁぁい…!!!!!」
彼女は罪悪感に押され大泣きしてしまった。

第6話～唐傘コンプレックス～

雷と美少女の組み合わせで泡を吹いた俺
なんとも滑稽な話である、まぁ彼女単体で驚くより何百倍もマシではあるが結果として驚いたのでなんの改変も出来なかった。
「なるほど、よく分からぬままこの世界に来たが運良く君は食事と宿にありつけたという事か」
彼女はコクリと頷く
「本当に感謝してます。旦那様がいなきゃ私のたれ死んでたかも…いや、飢えくらいで死なないかわちき妖怪だし」
小傘は飢えの恐怖に震え少し顔を下げたのだが、やっぱり違うとすぐに顔を上げた。
なんとまぁ切り替えが早い子なんだろうか。
とまぁそんなことを思いながら俺はズズっと熱いお茶を飲む
「ん…」
小傘が先程の寝起き騒動のお詫びとしてお茶を注いでくれたのだがこれがなかなか美味いのだ。
「小傘、君なかなかお茶を淹れるの上手いじゃないか、感心したぞ。」
「そうですか!?」と小傘は両掌をその場でパチンと合わせて嬉しそうにニッコリと笑った。
この子には色々な才能がありそうだ、少しずつ様子を見ていくとしよう
あ、そうだ
「小傘、今日さなんかすることあるか？」
「え？　うーん、まだこの世界に来て間もないですし旦那様のお家に泊めて頂いて1日目…私は何をしていいやら分かりません。」
そっか、そうだよな
「ならさ、今日俺と散歩でもしないか？」
「散歩ですか？」
今日は休日である土曜日、学校もないので買い物ついでに小傘にこの世界について色々教えていきたいものだ。

「で、でもぉ…わちき目立ちません？」
小傘は自分の服を少し引っ張りながら確認している
服は俺のを貸すとして、小傘の履物は下駄、それに加えて両目の色は違う。
「確かに目立つな…まぁ靴は慣れないかもしれないが俺が昔履いてたやつを貸すよ、後は……そうだな帽子を貸してあげよう、それで顔をあまり見られないようにしよう。」
「分かりました！」
１５分後…
「お待たせしました～」
俺が玄関で待っていると廊下の方から小傘がパタパタとこっちに走ってきた。どうやら着替え終えたようだ
どれどれ、ふむ良いじゃないか
俺のお古を貸したのでボーイッシュな格好になっているのだが充分良いじゃ…ん？
彼女は例のアレを持ってきていた。そう、ナスみたいなアレ
「君、その傘持っていくのか？」
俺は苦笑いしながらそう聞いた。
「え？持っていきますよ～私の半身なんですから！この子と私はいつも一緒ですよ！」
小傘はなんの問題も無さそうに言う
半身の傘の目もどこか自信に満ちているように見える
「で、でもそれ…周りから色々言われるのかにしてたんじゃ…」
幻想郷で傘について色々言われて落ち込んでいた話を先程聞いたばかりなのだが、その考えがどっかに行ってしまったのか平気な様子なのだ。
「気にしてましたよ？でもこの世界の人間の方々はもしかしたらそんなこと言わないかもしれないと思って！」
「え？…ん、まぁ…ん？」
もう分からん（
それからしばらく歩いて

「何アレ～」
「変なの～」
「お母さん～ナスみたいだよ～」
すれ違いざまに様々な人がいろんな反応をしてくる
うん、そりゃ目立つよな
最初止めようと思ったが彼女の半身でもあるんだから離れたくないだろうし、傘を馬鹿にされるのを克服しようとしている彼女なりの考えに文句を言いたくはないし…
この状況にどう思っているのかとチラリと彼女の方を見る
「はぅ～…／／／／／」
帽子を深々と被っているが耳まで赤くなっているのがわかる
「だ、大丈夫？」
ブンブンと首を横に振る
だよなぁ…
「な、なぁ小傘…やっぱりその傘家に置いてった方が…」
「旦那様までこの傘を!?　」
彼女はやはり泣いていた
「だって…恥ずかしいだろ？　」
「うぅ…」
彼女はしばらく黙り込んでから
「やっぱりわちきの傘なんて変なんですよ！わぁぁぁん!!」
小傘はそのまま走って行ってしまった。
「お、おい！小傘！」
聞こえていただろうが振り返らずそのまま行ってしまったので俺はそのまま小傘を追いかけた。
く、くそぉ…
俺は彼女を見失ってしまった。
追いかけていたのだが姿を消してしまったのだ、妖怪特有の行動なのか分からないが離れるのはマズイ。
早く探さなければ…
「お～い！小傘ぁ！どこだ～！」

警察に相談したいところだがどういう関係か説明するのも複雑で面倒だ
これは自力で探すしかない。
彼女なりのコンプレックスなのは分かるが、これをどのように解決していくかは彼女次第だ。だが、俺が干渉してはいけないということはなかろう
これは俺の意思、俺の決断だ。彼女を助けたいと思った以上俺は放っておかない。
彼女の悩み…それはあの傘だ、だが傘と彼女は常に一緒にいなければならない存在だ。人間が使う傘のように買い換えた方が良いだとか置いてけとかいう考えは愚行だ。俺は馬鹿な事を言ってしまったな…
彼女が行きそうなところ…とりあえずあそこだな
俺は小傘と出会ったあの小屋の裏にまた彼女がいるんではないかと思い
向かった。だが、彼女はいなかった…
「くそぉ…どこだよ…」
俺が頭を掻いて悩んでいると
「お困りかい？」
と声をかけられた。その方に顔を向けると
７、８０代くらいの老婆がそこにいた。
「え、あぁ、はい…お困りです。」
「だろうねぇ、顔に書いてるよ」
老婆はヒッヒッヒと笑う、小傘よりよっぽど妖怪っぽいのだが
「あの…あなたは？」
「わたしゃここに住んでるものだよ」
と、老婆は小屋の方に顔を向ける
え？この小屋に住んでる？てか、人住んでたのか…
「そ、そうなんですか…」
なんとまぁ怪しい老婆である。
「アンタの探してるもんの気持ちになりな」

「え？」
この人、何で悩んでるのか分かっているのか？気持ちと言ったぞ、つまり人と理解している、まぁ妖怪だけど
「その子がどんな子なのかその気持ちをどんな奴に伝えたいのか、それがわかれば探すのは簡単さ」
何者だ、このばあさん…全部お見通しじゃないか…
「どんな子で…その気持ちを…」
小傘は…そうか！
「わかりました！ありがとうございます！」
老婆はニタリと笑った。
「もっとちゃんとしな、あの子にはアンタが必要だよ」
「は、はい！」
俺の何が小傘に必要なのかよく分からないが俺は小傘がいると思われるある場所に向かう事にした。

第7話～成長の一歩は温かく～

傘の役割は切ないものだ。
雨に打たせて、ボロくなれば他のものにすぐに変え捨てられる
道具とは所詮そういうものだ。いつまでも持ち主の側にいれるようなものではない。だからこうやって彼女のような存在がある。
付喪神　それは長い年月使われた道具に霊や神が宿ったもの。
つまり彼女は忘れ傘の成れの果てである。
「ふふ、そうなんだ…楽しみだね」
彼女には傘の声が聞こえるらしい、人間や他の妖怪には分からないかもしれないが元々傘である彼女には傘の声が届く。
「あなたの色も素敵ね…」
こうやって同類だった仲間達と話すと気分が和むのだ。
彼女にとってそれは大昔の話
今では持ち主だった者の顔、名前さえも思い出せない。
妖怪にとって数百年なんてあっという間なのだが、あっという間とはいえ長い年月には変わらなく、記憶に残っていない。
今更思い出しても持ち主は人間、もうこの世にはいないだろうと彼女は思っている。
彼女は使われるのが好きだった。
傘としての結末は理解してたが、それでも持ち主に尽くせるのは幸せだったのだ。それの名残なのか、傘として使われなくても家に泊めてくれたという理由から「旦那様」などと言ってしまった。
「あなたはどんな人に買われたいの？　」
主人に忠誠を誓う
それは彼女にとって素晴らしい事であると自負している。
「小傘!!」
彼女は突然名前を呼ばれて驚いた。
「旦那様…」
そう、そこにいたのは彼女の今の主人だった。
何故ここが分かったのだろうと小傘は思った。

「ふぅ…やはりここだったか…あの婆さん良いヒントくれたぜ…」
これから怒られるのだろうかと小傘は少しビクビクしている。
先程、逃げ出してしまったのだから当然…
「大丈夫か？」
「え…あ、はい…ごめんなさい」
心配してくれていたのだ。
彼女は嬉しかったのか、モジモジしている。
「で、でも…どうしてここが？　」
「小傘の気持ちを考えればここかなって…傘屋さん」
そう、彼女は傘屋さんに来て傘達とお喋りをしていたのだ。
「そうでしたか…」
「なんの話してたんだ？」
「え？」
「さっき笑顔で傘とお話ししてただろ？　」
「えっとですね…」

「へぇ～傘にも色々感情あるんだなぁ」
２０分ほど話していただろうか
「ふふ、そうなんですよ～」
彼女は傘との会話を人に話すなんて初めてだった。
「あ、そういえば…ここの傘屋さんってお店の人どうしてるんだろう…全然見かけないんですが…」
店内をよく見るが人陰がない
「うーん、外出するなら書き置きくらいしててもいいよな…」
傘とずっとお喋りするのに夢中だったので全然気づいていなかった。
「旦那様は、ここのお店の人ご存知なんですか？」
「うん、昔からよく行ってるよ。渋沢さんっていうんだけど優しい人だよ、よく可愛がられた。」
「優しい人ですかぁ…この子達も安心出来ますね、良かったです。」
彼女はホッと胸を撫でる

「うーん…」
ハルは何か考えている
「どうしたんですか？　」
小傘は心配して声をかける
「小傘」
「はい？　」
突然名前を呼ばれたので驚いてしまった。
「これからも色々あるかもしれないが…お前にはずっと付き添ってやる、だからお前も負けずに成長していくんだ。」
いきなりそのようなことを言われたので動揺してしまったが、少し考えたら理解したようだ。
彼は小傘のコンプレックスの内容に深く触れないような言い方で励ましてくれているのだと。傘と彼女は一心同体、手放すことは出来ない。
なら、自分が強くならなければならないと、そう理解した。
「旦那様…」
「その旦那様ってのなんか恥ずかしいな…」
前々から呼ばれる度に口角が緩みかけるのが見えてたがやはり恥ずかしいようだ。
「だ、ダメだったでしょうか…？　」
「い、いや、小傘の好きなように呼んで良いよ」
何でもかんでも抑えては彼女の成長の妨げになる、彼女には好きなことは出来るだけやらせてやりたいのだ。
「ありがとうございます…」
ハルは小傘の感謝の礼に向けて微笑みながら頷く
「にしても、渋沢さんどこ行ったんだろ…」
ハルは店を出て周りをよく見た。
店を放ったらかしにしてたら泥棒にやられるかもしれないのに。と心配している様子でもある。
「仕方ない、少し探しに行くか…小傘はここで…」
小傘にここで待つように言おうとしたが彼女の目には何か決心し

たようなものを感じた。
「だ、旦那様…言いましたよね、私が成長しなきゃいけないって…」
緊張しているのか少し震えている。
「わちきも行きます！いつまでも成長出来ないままなんて嫌なんですからね！ここから挽回してやりますよ！」
ハルはニッコリと微笑み
「よし、よく言った！それでこそ日本の妖怪だな！」
と小傘の成長の第一歩に喜んでいるようだ。

渋沢さんという人物はハルが小さい頃から可愛がってもらっているご老人である。渋沢さんは子供が好きであり、傘を買ってくれたおまけに飴をくれるサービス提供してくれる。
「どこだろうな…」
「旦那様、渋沢さんってどんな格好をしているんですか？」
「そうだなぁ…青い線のボーダー服に黒の長ズボン…あと眼鏡、そうだいつもサンダル履いてるよ。」
渋沢さんは基本その格好をしているため後ろ姿でもすぐわかるものである。
「ぼーだーって…しましま模様って事ですか？　」
小傘にそう言われてハルは彼女の方を見た。
「そうそう、あれ？　知ってるんだ」
「あ～なんとなくですけど、あの人かなぁって、ぼーだーって服のイメージがわかんなかったんですけど青い線だし、長ズボンでサンダルで…」
え？っとハルは小傘の指差した方を見る
そこには彼等が探していた渋沢さんという人物がいた。
「渋沢さん！」
渋沢であろうその人物はハルの声に反応して振り返る
「お、おぉ…ハルくんじゃないか」
その人物は渋沢さん本人で間違いなかったそうだ。
「渋沢さん、お店放ったらかしにして何してるんですかー、泥棒入っ

ちゃいますよー？」
「え？　あーあー、うへへ、忘れてたぁ～」
　そういえば～みたいに渋沢さんは思い出したようだ。
「もぉー、一緒にお店行きましょ？　」
　ハルは少し怒り気味だが渋沢さんが見つかって嬉しそうである。
「んー？　そこの嬢ちゃんは誰だい？　」
「あ、私小傘って言います。こんにちは！」
　小傘はぺこりと頭を下げる。
「可愛いお嬢ちゃんやね～ハルくんや、もしかして彼女さんかい？」
　渋沢さんはニヤニヤしながらハルの肩に恥を当ててくる。
「ば、馬鹿！そんなんじゃないっすよ！渋沢さん！こ、小傘は…そのぉーなんていうんでしょうか…」
　ハルは顔を赤くしながら慌ててなんて言おうか考えている。
「お、俺の親戚の子です。」
　なんとまぁ、ベタな言い訳である。
「ほほぉ、そうかいそうかい～」
「あ、あのぉ!?　信じてませんよね!?　」
「いんにゃ～別に～？」
　ケタケタと笑う渋沢さんに振り回されるハル、その光景に小傘は笑っていた。
「ところで小傘ちゃん」
　渋沢さんは小傘の方を向く
「はい？　」
「その傘…」
　ゲッ！とハルは慌て出す。
「あ、えっと…」
　小傘も先程覚悟を決めたのだがまた何か言われるのかと焦り出す。
「渋沢さん！えっとですね！」ハルが話の話題を無理矢理変えようとしたのだが。
「可愛いね」
「ほへ？」

渋沢さんの意外な回答に二人は同じ声を発した。
「か、可愛い？」
「うん、可愛い可愛い、そのお化けみたいなデザイン好きだなぁ～なんか懐かしいよ。」
渋沢さんはそう言ってまた歩き出した。
「……」
小傘はしばらくぽけーっと立ち尽くしていたが
「小傘」
「…！はい！」
とハルの声でハッとなる
「…良かったな、褒められたぜお前」
ハルは嬉しそうにニコリと笑いながら小傘の背中をポンポンと叩く
「ふふふ…そうですね！」
小傘は嬉し笑いが止まらないようだ。
そんな彼等を照らす夕日はとても綺麗だった。

第８話～頑固な老人と不器用な少年～

渋沢寿一（しぶさわ　としかず）
俺とは昔から面識のある爺さんだ。
最初に出会ったのは…確か、４歳の頃だ。
母さんがまだいた頃、一緒に俺用の傘を買いに行ったんだ。
夕飯の買い物帰りのついでだったかな。まだ幼かった俺は母さんと色んなお店に行くのが好きだったから、こういった初めて行くお店はワクワクした。
今の俺は１８歳だから、１４年前になるのか
その時は初めて見る大人の人だったから、結構ビクついてたな…
４歳頃の俺は両親以外の人間とはほぼ面識がなく、友達と言えるほどの友達はいなかったから初めて見る人には大抵緊張していた。
そんな俺を本当の孫のように渋沢さんは可愛がってくれたのだ。
俺の祖父は俺が生まれる前に亡くなっていたから、このような関係を持てて幸せだった。
「なんで書き置きとかせずに外出しちゃうんですかぁ～」
「ばあさんはおらんかったかい？」
「渋沢さん…おばさんは…」
渋沢さんの奥さん　名前は「智代美（ちよみ）」というのだが
おばさんは2年前、亡くなっている。
仲の良い夫婦で、おばさんも俺に優しくしてくれていた。
「あぁ…ごめんね…そうだったね…」
渋沢さんは少し暗い顔になった。
この通り、渋沢さんは物忘れが多く、知人から身内の事さえも忘れることがある。俺が高校生になったと報告をしたその次の週に会ったら
「来年高校生だっけ？」と、言ってきたのだ。
いわゆる認知症というやつである。
「渋沢さん…」
渋沢さんは今年で７８歳でかなり高年齢であり、身体も弱くなって

きているためかなり心配している。
隣にいる小傘も察したのか表情が少し暗くなっている。
「さて…着いたねぇ」
そんな話をしながら俺たちは先ほどの傘屋に着いた。
ガラリとした店内、人が全く来ないというわけではなく今は午後6時過ぎでこの時間帯は基本人は来ない。
「そういえば…なんでおじちゃん探してたの？」
渋沢さんは店内の椅子に腰を下ろしてそう話し出した。
「えっと…まぁ小傘がある事情でここに来てまして、それを俺が見つけて小傘とこのお店についてとか話してたんですけど、渋沢さんがなかなか帰ってこなくて…それで探しに」
「お邪魔してました…」
と小傘も一礼
小傘の正体や成り行きは誤魔化しつつそう話した。
「ああ、そうなんだ…ごめんねぇ」
最近よく謝られるな…俺
「どこ行ってたんですか？」
「えっとね…」
渋沢さんはしばらく黙り込んでから
「病院…行ってきたんだ。」
「…！」
前々から病院に通っているのは知っているのだが、こう話されると動揺してしまう。
「な、何か言われましたか…？」
「んー…老人ホームに通って下さいってね…」
渋沢さんにはもう身内が居なく、介護してくれる人もいない。
だから老人ホームを勧められたのだ。
「渋沢さん…」
渋沢さんはよく言っていた。
この店で生涯を終わらせたいと。
だから、そのような施設に通う気は無いと。

「渋沢さん…もう休んで良いんですよ…？」
　前はおばさんと渋沢さん同士が協力しあって仕事は別で働き生活費はそこまで困らなかったのだが、おばさんが亡くなってから渋沢さんは一人になってしまい、おばさんは保険にも入っていなかったので元々稼げた分の生活費を作る為には渋沢さんがおばさんの分も含めてという事で、傘屋意外にもアルバイトをいくつかやっている。
　傘屋は、良い店なのだが売り上げはあまり良くなく満足した稼ぎはしてなかった為このような形になってしまった。
「いや…おじちゃんは最期までここで頑張るよ…」
　彼なりのプライドなのだが、俺は心配で心配で仕方がないのだ。
「渋沢さん…無茶はダメだよ…おばさんだってこんなこと望んでないだろ？…だからさ、もう休もうよ…な？」
　渋沢さんは下を向いたまま
「ありがとうね、ハルくん…でもね、おじちゃんは諦めないよ…」
　その時俺に積み重なってた苛つきが溢れてしまった。
「なんでだよ、渋沢さんもう年だろ…？　いい加減休めって…頼むから…」
「おじちゃんには…やり残したことがあるんだよ」
「やり残したこと…？なんだよ…それ…」
「内緒だよ、これはおじちゃん一人の問題だからね。」
「はぁ…？なんで、隠すんだよ…」
　渋沢さんは優しい人なのだが妙に頑固なところがあり、ここまでくると俺は焦りで激昂してしまう。これ以上無理はさせたくないんだ…
「旦那様…」
　小傘の一声で少し落ち着きを取り戻した。
「…なんだ？」
「渋沢さんの考え信じてあげませんか…？」
「こ、小傘…!?　」
　なんだよ、小傘も賛成してるのかよ…
「小傘ちゃん…」

渋沢さん自身も驚いているようだ。
なんだよ…人の心配を…
「ああ！もう！勝手にしろよ！」
「だ、旦那様どこいくんですか!? 」
「散歩だよ散歩!!」
俺が間違ってるみたいじゃねぇか、なんだよちくしょう！
「旦那様！」
「小傘ちゃん、大丈夫だよ。ハルくんはすぐ戻ってくるから」
「で、でも…」
「ハルくんは何も間違ったことは言うとらん…おじちゃんのわがままなんだからね…。」
「渋沢さん…」

ったく…渋沢さん…何を理由にそこまで…
おかしいよな、辛いお願いなんてしてないのに…
むしろ、幸せな事じゃねぇか…
俺だって…俺だって…
「恩返しの一つや二つしてぇよ…」
この前だってそうだ…俺がバイトで稼いだ分渋沢さんに渡そうしたら
気持ちだけで良いって…あんたがそう…何でもかんでも拒んだら…
俺何にも出来ねぇじゃねぇかよ…
少しくらい…少しくらい…
受け入れてくれても良いじゃねぇか…
馬鹿野郎…

第9話～おあいこです！～

私がこの世界に来て親切にしてもらったのはこれで二人目だ。
渋沢さん。旦那様が身内以外に初めて打ち解けあえた人でとても優しい人。初対面でもすぐに良い人だと信じれてしまう、心温かくする笑顔と気持ちを安らかにしてくれる喋り方。この二つが実に渋沢さんがどのような人柄なのかを教えてくれるのだ。この人にはこれっぽっちも悪いイメージが湧かない、人を疑う事をなかなか知らない旦那様だがこの人なら私も信用してしまう。しかし、そんな二人は先ほど喧嘩してしまったのだ。
「渋沢さん、あなたがこのお店に残ってまでやりたい事ってなんなんですか？」
「うーん…」
渋沢さんは口を重く閉じたまま喋ろうとしない
それほど他人に話せない事なのだろうか？
「どうしても話せませんか…？」
黙ったままコクリと渋沢さんは頷く。
「そうですか…」
これ以上問いかけることは失礼だと思い、私は一礼をして店を出た。
「旦那様を探さなきゃ」
渋沢さんの考えについてしっかり知っておきたいが、私としては主人を心配したい。
旦那様…どこだろう
さっきまで小傘自身が探される身だったのだが逆転してしまった。
旦那様も世話焼けるなぁ～…ってわちきもか
小傘は勘を頼りに自分の主人を探す。

＜＜一方ハル＞＞

何やってんだろ俺…
あの人を助けたいと思ってたのに本人の考えに逆らってただ迷惑かけただけじゃないか…
「はぁ～…」
ただ一人ですっかり暗くなった近所の公園のブランコに腰を掛けてハルは深いため息を吐く。
頭を両手で掻きむしりながら自分の無力さを痛感する。
ふと顔を上げて公園の遊具などを見渡す。
…なんか…久々に来たな…ここ
なんて言うんだっけ…あぁ、そうだ「桜里公園（さくらざとこうえん）」だ。
「桜里公園」は俺が小さい頃、よく遊んだ公園だ。渋沢さんと仲良くなった後、人に慣れていき順調に友達作りに成功していってここには友達を連れてよく通ったものだ。
あそこの滑り台の着地点に落とし穴作ったりして友達をよく引っ掛けてたり、ジャングルジムを使って鬼ごっこしたり…
今座ってるブランコだって、俺が下手して頭から落ちたんだよな
「ふふ、なんか懐かしいな」
様々なこの公園での思い出を浮かべてるとクスリと笑えてくる。
あの時仲良かったメンバー…みんな引っ越しちゃったし他の学校行っちまったんだよな。
俺の通ってる高校は新しい顔ぶればかりで、昔からの友達との再会などは無かった。そんな中、渋沢さんはいつも俺の側に居てくれたんだ。
暇な時が出来ればよく訪ねてきてくれた。
渋沢さんったら、運動は昔から出来ないって言うてたのに、俺が何も用事がない時があれば「キャッチボールやろ！」とよく誘ってきたものだ。
何度も何度も、時には買い物とか散歩とか、外食とかも…
良い人だよな…ホント…俺が寂しくないように色々してくれて
親が居なくなった後でもあの人がいたから寂しさも和らいだんだ。
だから、たまには恩返ししたくて稼いだバイト代を差し出そうとし

たのだが、見事に断られてしまった。
渋沢さんはあの店に残って何をしたいのだろうか…
お金がダメと言うならその店に残ってまでしたい事の手伝いをしたいのだが、どう聞き出すか…
と思ってたその時
「あ！いた！」
聞き覚えのある声がしてその方向にハルは顔を向ける
「小傘…」
必死に探してくれていたのだろう、彼女は息を切らしている。
「も、もぉ、意外と近いところにいたんですね…結構先の方まで行っちゃいましたよ…はぁ…はぁ…」
どうやら、遠くまで探しに行ってしまってたらしい。
「ごめんな…迷惑かけた…」
「……」
怒るかな…
「これでおあいこですね。」
「へ？」
「だーかーらー、お互いに探させたんですからおあいこです。だから全然大丈夫ですよ。」
小傘は気持ちいい笑顔でそう言った。
ふふ、なんかこいつの笑顔見てると幸せな気持ちになるな
「あれ？なんか私おかしい事言いました？」
「ううん、ありがとうな小傘」
「いえいえ」
まったく…お前も良いやつだな

「うーん、そうか…小傘にも教えてくれなかったのか…」
「はい、あまり聞き込むのは失礼かと思ってそこまで立ち込む勇気は…」
さて、どうやったら渋沢さんは話してくれるだろうか…
とは言うもの、本人に聞き込み続けるのはストレスの原因にもなっ

てしまうから無理には出来ない…
「あっ」
ふと何かを思いついたように小傘は声を出した。
「ん？　どうした」
「わちきに良い考えがありますぞ」
また小傘のキャラ作り口調が
「おお、何だ？」
「ハルさんは渋沢さんに迷惑をかけずに渋沢さんの考えを知りたいんですよね？」
「そうだな」
「じゃあ、渋沢さんを見ていた子達に聞けば良いんですよ！」
「えぇ？……あ…そっかぁ…」
「どうですか？良い考えだと思うんですが」
確かに、この方法なら渋沢さんに迷惑かけずに情報をつかめるかもしれないし、渋沢さんが成し遂げたいことの手伝いも出来るかもしれない。
「よし、任せても良いか？」
「もちろんです！私にしか出来ない仕事ですからね！」
ほんとそれだ、これは小傘にしか出来ない事だ。
よし！頼むぜ…小傘！
こうして俺たちは「渋沢さんに恩返しするぞ大作戦」の準備段階に取り掛かったのだ。

第１０話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦①～

「渋沢さんに恩返しするぞ大作戦」
なんともシンプルかつ目的がわかりやすい作戦名だ。
作戦の初めとして小傘の力を借りる。
渋沢さん本人から話を聞き出せないならその周りにいる、本人をよく知る者達に情報を貰うのが効果的なのである。
作戦を始める前に渋沢さんにバレないように店から本人を出さなければならない。そこで、俺と小傘は別行動に移る必要がある。
「さて、情報は小傘に任せるとして…」
「旦那様はどう渋沢さんを連れ出すつもりですか？」
自然かつ怪しまれない動きで渋沢さんを店から連れ出す。
「外食に誘う」
今は夜の７時半
時間帯的にこれが一番良い案だと思う。
「わかりました。あ、あとちゃんと謝ってくださいよね、怒鳴っちゃった事とか…まぁ旦那様も必死だったのは分かりますけど…」
「おう、食事誘うのもその気分転換の為でもあるしな、ちゃんと考えてるよ」
「そうですか、良かったです。」
小傘は気弱そうに見えるが言いたいことはちゃんと言える子だ。
相手の悪いところはちゃんと言ってくれる。
「よし、じゃあ作戦始めだな！」
「はい！」
うまくいくといいな…

＜＜５分後＞＞

「ただいま」
俺が帰ってきたのを確認しようと渋沢さんが店の奥から小走りで出迎えてくれた。

「お帰りなさい」
　渋沢さんは笑顔でそう言った。
「あ、あの渋沢さん…」
「んー？」
「ごめんなさい…」
　今言いたかった事を言うことができた。
「ふふ、帰ってくると信じてたからね、良かったよ」
「俺もう無茶言いません、迷惑かけてごめんなさい！」
「ううん、ハルくんは優しい子だからね、気持ちだけでも嬉しいよ」
　渋沢さんはそう言いながら俺の頭を撫でる。
「あっ…やめてよ、恥ずかしいよ…」
　その様子を小傘が口元を手で隠しながらクスクス笑っているのがわかる。
「旦那様顔赤いですよ～」
「う、うるさいなぁ～」
「旦那様…？　ほほう、やっぱそういう関係なのかね」
　俺は二人にニヤニヤとからかわれる。
　作戦開始って言った後にすぐこれかよ…トホホ…
「し、渋沢さん！あのですね！」
「いいんだよいいんだよ、いや～若いって良いね～」
　も、もういいや…
　俺は誤解を直さずに溜息を一つ
「そろそろ夕飯の時間だねぇ」
　と、渋沢さんは時計の方を見てそう言う。
　チャンスだ
「あの渋沢さん、俺と外食とかどうですか？」
「外食？　急にどして？　」
「いやぁ、そのたまには奢らせて欲しくてさ、ダメかな？」
　現金の直接の手渡しは断られたがこれならどうだ？
「いいよ、行こうかね」
　よし！

「良かった、じゃあ俺準備終わるまで待ってますね！」
「小傘ちゃんも来るのかい？」
「あ、私はこれから…えっと、仕事なので」
「仕事？」
うわ、何変な誤魔化し方してるんだよ！
「こんな時間帯からの仕事…？　小傘ちゃん今何歳？　」
ほらほら、渋沢さん困惑してきてるじゃん
「えっと、軽く１００は超えてるかと」
あぁ！止まらんこの子!!
「え…えぇ…？　」
渋沢さんは困惑のあまり頭を掻き始めた。
「あーあー!!ごめんなさいね！渋沢さん！仕事ってのは学校の宿題の事ですね！あと今のは冗談ですよ！この子ったらほんとっ冗談好きでね！もぉ～ははは！」
「そ、そうなのかい？」
「えっと、あっ！そ、そうです！」
小傘も自分が妙な事を連発してる事に感づいたのか、慌てた様子でそう答える。
「あはは…びっくりしたぁ…」
渋沢さんは卓上のハンカチで冷や汗を拭きだした
「１００歳超えててこんなに若いだなんてまさか幽霊や妖怪なのかと…あはははは…」
げっ！鋭い！
「そ、そんな～違いますよ～ほらほら、早くご飯食べに行きましょ？」
「そうだね、待っててね」
と言い店の奥に行く渋沢さん
それを確認してから俺は小傘を細目でジッと睨みつけてやった。
「ひっ!?」
「こ～がさちゃ～ん」
「は、はひ？」
バッチィィン

「あいた～!!!」
俺の指パッチンが小傘の額に炸裂する
「な、何するんですかぁ～!! わちきなんも悪いこと～…あ～し、しました…ね…うん」
小傘は額を手で押さえながら納得した。
指パッチンは派手な音は出たが実はあまり痛くないように打ってある。
アザとか出来たら大変だしな
にしてはオーバーリアクションだな
「小傘～気をつけろよな～」
「わ、わちき…頑張ります…」
よしよしと小傘の頭を撫でてやる
「はわわ…」
「さっき笑ったお返しだ」
小傘の頭をくしゃくしゃにしてやった。
「もぉ～…」
小傘はほっぺたを膨らませている。
と遊んでるうちに渋沢さんが戻ってきた。
「ごめんごめん、遅れたね、じゃあ行こっか」
「じゃあ小傘また明日な」
と手を振り俺と渋沢さんは店を出る
「お二人さん楽しんできてくださいね～!」
小傘がそう言いながら見送ってくれた。

「よーし!わちきも頑張るだわさ」
さっきはぶっ飛んだミスをしちゃったけど次からは気をつけるぞ!
と、意気込みを踏みながら傘屋の前に売り出されている傘達の前に行き
「みんな～!ちょっといいかなぁ～」
「はーい」

「なになにー？」
「どしたのー」
「おねーちゃんだー」
　次々と傘が喋り出す。
　これが小傘の言っていた傘達の声である、小傘が言ってた通りこの声は小傘以外には聞こえていない。
「あのね～渋沢さんについてなんだけど～」
「しぶさわさんすき～！」
「やさしいよ～！」
「わすれっぽい～」
「にこにこ～」
　みんな渋沢さんの印象をそれぞれ言い出す。
「渋沢さんがこのお店でどうしてもやりたい事とかみんなわかる～？」
「「「やりたいこと～？」」」
　みんな一斉にそう言い返す。
　するとわちゃわちゃと話し合いが始まった
「あれかなー」
「あれだよねー」
「それでしょー」
「だよねー」
　どうやらみんなわかってるようだ。
「あのね～しぶさわさんね～」
「うんうん」
　一本の傘が小傘に喋り始めた
「いきているあいだに、ぼくたちみ～んなうりたいんだって」
「そうなの？」
「うん！しぶさわさんみんなをひとのもとにいかせてあげたいんだ」
「この子達を全部…」
　渋沢さんがどんな考えでみんなを売りたいのかは分からないけど…でも、大切な理由があるんだと思う…

「旦那様が帰ってきたら報告しなくちゃ、みんなありがとうね」
「うん～」
「他に何かある？」
「あとね」
「ん？」
「しぶさわさんもうすぐしんじゃうみたいだよ」
「……ッ!!?」
衝撃的な発言に小傘は絶句した。

第11話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦②～

店員さんが俺の前に缶ビールを置く
「ハルくんは…もうお酒飲めたっけ？　」
「いやいや、俺まだ未成年ですよ!?」
相変わらずの認知症である。
「あれぇ？そうだっけな…そっかぁ、未成年かぁ…」
残念そうに渋沢さんは缶ビールをグイッと飲む
「てか、なんで焼き鳥屋なんですか？」
食事に誘ったのは俺なのだが、店を選んだのは渋沢さんだ。
「だっておじちゃん焼き鳥好きだもん。」
「え～まぁ、俺も好きですけどねぇ？でもこういう時は…」
焼肉とかにしましょうよとか言おうと思ったが渋沢さんに恩返しをしたい気持ちがあるので本人の好きなものを食べて欲しい。
まぁいっかぁ～と笑いながら俺はねぎまを一齧り
「あのなぁ、渋沢さん」
「んー？　」
俺はまた謝ろうかと思ったが、この楽しい雰囲気を壊すのも悪いと思い口に出すのはやめた。
「いや、なんでもねぇや…それより今日は俺の奢りだからさ、好きなもん食べてくれよな」
渋沢さんいつも一人で頑張ってるもんな、たまにはこういった恩返しをしたいのだ。
「ハルくん…」
渋沢さんは今にも泣きそうな目でニッコリと嬉しそうに笑っていた。
「あれ？渋沢さんもしかして泣いてるの!?あれ～？」
俺はチクチクと渋沢さんをいじり始める
「な、泣いてないやい！」
渋沢さんは慌てて腕で目をこすった。
ふふ…今日は良い日だな…食事誘ってよかったや

小傘はどうしてるかな…

<<一方小傘>>

「渋沢さんが死んじゃうって…なんで…」

あんなに元気なのに…

脳裏に渋沢さんの元気な様子が映る

「しぶさわさんはずっとまえからじぶんがもうすぐしんじゃうことしってたんだよ」

また違う傘が喋り出す。

「ずっと前から…?じゃあ今日は病院で何しに…確か、老人ホームってところを勧められたんじゃ…」

介護施設とでも言うのかな、そういったところに行くように勧められてたはず…でも…

「ううん、きょうでもないしろうじんほーむじゃなくてにゅういんをすすめられてたんだよ」

「え…え?」

全く噛み合わない…どういうこと…

「よくわかんないけどそんなことといってたよ、でもことわってた」

「ま、待って!今日は病院に行ってないの!?」

話がごちゃごちゃし過ぎてついていけてない自分がいる。

「きょうはどこいってたんだろうね…わかんないよ」

渋沢さんが嘘をついてたってこと…?あーでも忘れてただけなのかも…変に記憶が…

わからない…

「うーん…どうしよ…わかんなくなってきちゃった…旦那様の力になれないよ…」

「きのうはあめだったからね、ぼくはしぶさわさんのかさだからびょういんいくときにつれてってくれたんだ。」

渋沢さん、自分の傘を売り物の隣に置いてるのか…

そっか…それなら傘達がそういった情報を持っている理由がわか

る…
「じゃ、じゃあ…渋沢さんは後どのくらい生きられるの？」
聞きたくない自分がいるが聞いてしまった。
「らいしゅうまでがげんかい…とかいってたよ」
来週…えっと…来週!?
「そ、そんなに…」
こうしちゃいられない！
「旦那様と渋沢さん探さなきゃ！」

＜＜一方ハル＞＞

「なぁ、渋沢さん」
「なんだい？ 」
「どうしても、お店に残ってまでやり残したいことって言えないのかい？」
この事は小傘に任せたはずなのに聞いてしまった。
「はは、言えないなぁ…」
「そんなに…迷惑なのかな…」
ここまで信用されてないとちょっと寂しい
「傘屋さんまだ続けるんだよね…」
「まぁ、生きているうちはずっとさ…」
だんだんと会話が暗くなってくるのがわかる、何故だろうか
恩返しに食事に誘ったのに俺はまだ不満があるという訳か…
あーもう…やっぱ我慢出来ないな…俺
「渋沢さん…お願いだ…せめてその内容だけでも聞かせてくれ…」
悪い奴だな…俺も、内容聞いたらそれを手伝う気なのに、だけでもって言っちまった…。
「ハルくん…」
渋沢さんは困った表情をしている。
また困らせてしまったな…でも、聞きたい…
「そうだね…話すくらいなら」

渋沢さんはやっとそう言ってくれた。
「うん…で、なんなんだ？　」
「おじちゃんね…お店の傘ぜーんぶ売りたいんだよ…」
「そうなのか…？　」
「ほら、売れ残っちゃってさ…使ってくれる人もいなくて捨てられちゃうの…可哀想だろ…？　」
なるほど、渋沢さんらしい優しい考えだ。
「後何本くらいあるんだ？　傘」
「そうだねぇ…確か…うーん、２３本だね」
認知症であるため、正確じゃなかったとしてもそこそこの数である。
「２３本か、多いね。全部売り切れそう？　」
「売り切ってみせる。」
渋沢の目の色が変わった。この人は本気なんだ…
「おじちゃんの子供達みたいなものだからね…みんな旅立たせてあげなきゃ…」
とてつもなく堅い意志なのだろう、揺るがぬ信念を感じる。
「なぁ…売るの俺にも手伝わせてくれないか？」
「えぇ？」
「その方が効率良くなると思うよ？」
「ダメだ、これはおじちゃんのケジメでもある…ばあさんと約束したんだ。」
渋沢さんは重い表情で缶ビールを飲む
「おばさんと約束？」
「ああ、ばあさんはあの子達にいつも言ってくれてたんだ…必ず良い主人出会えるよって、そのばあさんの気持ちに応えてやりたいんだよ…おじちゃんは…」
渋沢さんにここまでの熱意があるとは…
温厚な人だと思っていたが、こう言ったところには男の意地というものを感じる。
「で、でも…手伝うくらい…」

「ダメなもんはダメだ」
渋沢さんは声を低くしてそう言う。
今までに聞いた事がなかった声だ。
「……」
俺はその威圧に黙り込んでしまった。
「…ごめん、そろそろおじちゃん帰るよ」
「あ、うん、お会計しとくね、奢りだから」
「うん…ありがとうね、ご馳走様」
そう言って渋沢さんは店を出た。
「はぁ…なんか上手くいかなかったなぁ…」
天井を見上げながら俺はため息をつく
「俺も帰るか…」
座席から立ち、俺は会計を済ませて店を出る。
失敗したなぁ…小傘の方は上手くいったかな
とぼとぼと帰り道その道中で
「あ、いた！」
この声は…小傘？
「あれ、なんでここにいる…ってまた俺探してたのか？　」
「あぁ、あの、あの…あのですね！」
小傘の口が上手く回ってない
「落ち着け、どうしたんだ。」
小傘はその場で深呼吸をした。
「渋沢さん…余命が僅かなようです…」
!?
「は…？　嘘だろ…」
「傘達がそう言ってました。そして、病院へ行ったのは今日じゃなくて昨日だそうです…しかも、お医者さんからはにゅういんするよう言われたそうで…」
「わけわかんねぇ…どう言う事なんだよ…」
頭の中がいっぱいっぱいになりそうだ。
渋沢さんの余命が僅か？　病院に行ったのは今日じゃなくて昨日

？　医者に言われたのは老人ホームについてじゃなくて入院…？
くそ…！
「小傘！渋沢さんのところ行くぞ！」
「は、はい！」
焼き鳥屋から傘屋はかなり近い、もう帰ってるはずだ。
渋沢さん…もうすぐ死んじまうのかよ…
俺はまだあんたになんも返せてねぇ、さっきだって俺のせいで楽しい雰囲気作り切れなかった！ごめん…ごめんよ！渋沢さん…俺は、俺はまだ…
あんたに恩返しを…
焦りと感情の高ぶりで息がもたない
クソォ！
だが、足は止めずに走り続けた。
「はぁ…はぁ…」
小傘も一生懸命ついてきてくれている。
せめて話を…
見えた！傘屋！
「渋沢さん！」
走ら姿勢のまま俺は店に突っ込んだ。
「はぁ…はぁ…し、渋沢さん…？」
「…どこでしょう…はぁ…はぁ…」
渋沢さんが見当たらない
「どこだ…」
店に二階はない、すぐ見つかるはずだ。
しかし、どこを探してもいない…
「小傘！いたか!?」
「いません…」
早過ぎたか…？
あ、そうだ。
「小傘！傘達に聞いてくれないか！」
「わかりました！」

傘達なら何かわかるはずだ。
「みんな、渋沢さんどこに行ったか知らない？」
「おみせのなかにいるよ？」
「えぇ？」
「なんか…かおいろわるかったけど…」
「だ、旦那様！渋沢さんは中にいます！顔色が悪かったみたいです！」
まさか…
俺は視線を低くして探す。
嫌な予感は恐らく的中してしまうだろう…
「しぶ…さわ…さん？」
店のカウンター裏から何か見えた。
それが何かはもうわかってしまっている。
「お、おい…」
そこには
「どうして…クソ！」
仰向けに倒れた渋沢さんだった。

第１２話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦③～

日が昇り新しい朝が来た。
眩しい日差しと冷たい風が身に染みる。その快感は、心地良いものなのだが心はスッキリしなかった。
前日、渋沢さんは病院に運ばれた。
気を失っていた渋沢さんを見つけた時、嫌な脂汗と吐き気が交じった感覚に襲われながら必死に彼の名前を呼んでいた気がする。
狂いかけていた俺を止めてくれたのは小傘だった。
本当に助かった。
すぐに救急車を呼ばなかった俺の馬鹿みたいな叫びが自分の耳に残る。
「旦那様」
俺のすぐ横に小傘が来ていた。
その手には缶ジュースを持っていた。
「あの…旦那様から頂いたお小遣いで買ってしまったのですが…良かったらこれ」
ついさっき自動販売機と缶ジュースの存在について聞きたそうだったから話したのだが、やれやれ早速俺の為に買ってきてくれたのか…
何かあった時の為に小傘に小遣いを渡していたのだが、本当に人に優しい子だな…
「…うん、ありがとうな」
彼女の気持ちにあれこれ言うのも恥ずかしい。
俺はその缶ジュースを頂くことにした。
程良い炭酸が少しは気分を良くした。
「病院の中、慣れたか？」
小傘にとっては迷路みたいなところだろう、初めて入った時かなり慌ただしかったからな。
「ええ、まぁ屋上までの道と自動販売機がある所はとりあえず…えへへ」

小傘が缶ジュースを買いに行って帰ってくるまで２０分かかっていた。
地図がある場所くらい案内しとけば良かったな。
頑張って探してたんだろう、暑そうだ。
「小傘」
「はい？」
スッと小傘に缶ジュースを渡す
「喉渇いたろ、良いぞ」
「え、良いぞって…え？」
イマイチ理解してないようだ。
「飲んで良いぞ」
「で、でも」
「元々お前に渡した小遣いだ。別に飲むくらい悪いことじゃないだろ？」
「じゃ、じゃあ…貰います！」
小傘は勢いよく缶を受け取りグイっと飲んだ。
「っ!!?」
あ、そういえば炭酸飲料とか初なんじゃないか？この子
「な、なんだぁこらぁ!!?シャワっとビリビリってしちょる!!」
変ななまり口調になってて俺は思わず吹いてしまった。
「ふふ、それが炭酸飲料ってやつだよ小傘」
小傘は目を丸くしながら缶の隅々まで回しながら観ている。
「た、炭酸、あぁ～なんか河童たちがそんなこと言ってた気が…」
幻想郷にいる河童の話なのだろうか、なんだ？　そんな理科っぽい事するのか河童って。
「さて、そろそろ渋沢さんの様子見に行こうぜ小傘」
「そうですね。」
渋沢さんが眠っている病室前まで俺たちは来た。
「よし。」
トントンと二回扉にノックをしてから入室した。

「……」
実際病室と呼ばれる場所に入るのは初めてだ。
医療ドラマとかでよく見るあの部屋通りだった。
ベッドと椅子が二つ、そして窓。
小傘と俺は二つの椅子にそれぞれ腰をかけた。
「…こうして見ると…死んでんのか生きてんのかわかんねぇな…人の寝顔って…」
いきなり不謹慎な事を口走ってしまった。
「だ、旦那様？」
「あっ…何言ってんだ俺…」
馬鹿野郎と自分の頭を叩く。
「旦那様疲れてますね…」
「うーん…ちゃんと寝てなかったしな…小傘は？」
「えへへ…じつはわたひもねぶそ…はぁ～あ……あっ！すみません！」
喋ってる途中に大きなあくびをぶちかました。
「あはは…お互い寝不足みたいだな」
お互いの顔を見ながら笑い合ったあと、眠っている渋沢さんの方に顔を向け直す。
「全くよ…あんた最期まで俺に黙ってる気だったのかよ。俺だってもう子供じゃねぇって言ってんのに…黙ったまんまでさ…」
渋沢さんは優し過ぎた。全部自分で背負っていくつもりだったんだろう。昨日の焼き鳥屋は確かに俺が奢ったが、全然食べていかなかった。かなり遠慮していたのだろうか。
「旦那様に本当に優しい方ですね…渋沢さん…」
「俺だけじゃなくみんなに優しいさ…親が居なくなっちまった俺にとっては本当の親みたいなもんだったがよ…あの優しさは…」
「ですね。」と小傘はニコッと頷く。
「心臓疾患か…もしかしたら食欲ないのに無理してたのかな…わかんねぇ…」
そう、渋沢さんは過労による心臓疾患に陥ってしまっていたのだ。

「最後まで無茶するぜ…あんた…」
本当にいつも優しく、自分のことは構わないからと他人に力添えをしてくれる。まさに聖人そのものだった人。
そんな人に恩返し出来ないままだと言うのか…
ダメだダメだ…そんな事…
だが…どうしたら…
「旦那様…」
頭の中で考えがごちゃ混ぜになっている俺に小傘は声をかけた。
「……ん？」
小傘は真っ直ぐな眼差しでこちらを見つめている。
ここまで真剣な眼差しをする彼女は初めて見た。
そして
「私たちに今できる事…何かあるはずですよ。」
その言葉を聞いて俺はふと思い出した。
「できる事…そうだ…あるじゃないか…渋沢さんのやりたい事…」
本人は言っていた。死ぬ前に成し遂げたいと、つまり…
生きている間に実行させたいと。
あの時はまだ自分でも出来ると思っていたのだろう。だから自分で成し遂げようとしてた…しかし、この状況…。
「渋沢さんならこの状況、人に頼むはずだ…おばさんと傘達の為なんだから…自分がもう動けないなら…そうするはずだ！」
当たり前のことを何故思いつかなかったのだろう。
ぼんやりとしてた俺に着々と考えがまとまっていく。
「…ありがとう、小傘…やりたい事がまとまった。」
小傘は良かったと頷く。
「俺たちで成し遂げる…渋沢さんの思いを背負ってな…。」
「じゃあ…私もしっかりお手伝いさせて頂きますよ旦那様。」
「傘を全て売る…大作戦はここからだ！」

第13話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦④～

恩返しってのは人に頼んでやらせて貰うんじゃない、自分から行動してやるのが普通だ。変に焦っていた俺はそんな簡単なことにも気付いていなかったのか…。

「それで全部か？」

小傘は束ねて持っていた傘をその場に下ろす。

「ひーふー……はい！これで全部ですね！」

そう言うと小傘はスカートについたホコリを払いながら立ち上がった。

「よし、後はどう商売するかだな…」

何の許可もなく街中で商売するのは法律上ダメだった気がするしな、さてどうやって…ん？

「いや、人に届ければ良いのか…」

そうだ、商売しろって話じゃない、今考えれば良いのはどう人々に傘を届けるかだろ。

「でも難しそうだな、今日の予報は晴れだ…条件が噛み合わないとなかなか…」

「なに弱気になってるんですか！やってみるまで分からないじゃないですか！」

「うーん…」

「…き、厳しいですか…？」

さっきまで根性で乗り切ろうとしてた小傘が心配そうに伺ってくる。

「雨さえ降ってくれればな…」

雨…雨ねぇ…

「待ってても仕方ないしな…とりあえず傘屋のボランティアって言う成り行きで街に…」

仕方無しに傘を持って行こうとした時

「…雨降り小僧」

小傘がボソッとそう言った。

「雨降り…？」
「雨降り小僧ですよ、妖怪の」
雨降り小僧…名前の通り現れると雨が降るっていう妖怪だったっけか？
唐傘お化けと同様日本ではかなりメジャーな妖怪だ。
「なるほど…雨降り小僧に雨を降らしてもらうようにするって訳か…」
でもどうやって見つけるんだ。探すったって簡単には…
「てか、妖怪って居るのか？幻想郷じゃなくても」
「いますよ、外の世界から幻想郷に来訪なされる方も結構いますからね、外の世界で認識が薄れ力が弱くなってしまった妖怪などは幻想郷に自動的に呼び込まれるらしいですからね」
と、小傘は得意げそうに人差し指を立てながら解説をする
「となると、幻想郷に行っちまう前に急いで探さないとな…何か当てはあるのか？」
「狐です。」
「き、狐…？　」
全く結び付きが分からない答えが返ってきた。
「「狐の嫁入り」って分かります？」
狐の嫁入りって…例に言う天気雨ってやつじゃ…あっ
「狐が結婚式を行う際、雨降り小僧に雨を降らせてくれるように頼むみたいでしてね、狐だったら雨降り小僧の居場所がわかるかと」
すげぇ、小傘って結構冴えてるな
「で、その狐は？　」
「……」
あ、考えてなかったんだ。
「あ、策はありますからね!?　決して無い訳では！」
俺のガックリした目線に感づいたのか慌てて喋りだす。
「その策とは！」
「その策とは？」
「そ、その策とは!!」

「その策とは…？」
……
「無茶…しなくていいぞ…？」
「…あ……げ…」
ん？　今何か言ったな
「え？　」
「油揚げ…で、釣ります…」
よっぽど恥ずかしいのかこちらに目を向けずに横を向きながらそう言う。
横からでも顔が赤面してるとわかる。
「油揚げ…か」
確かに狐の好物って言うよな…油揚げ…
本当に食うのか？
「幻想郷にいたスキマ妖怪のところの九尾の狐の式神が油揚げ好きだった気がしますから、多分大丈夫…です。」
ほ、ほう…よく分からないが幻想郷側の狐はちゃんと好んで食べるみたいだな…
「外の世界…しかも現代の狐は油揚げ好んで食うんだろうか…」

小傘は準備が必要だと一度俺の家に戻ってからとある森林に来たわけだが
「昔、探検気分でここに来たことがあってな、ここなら狐も居そうじゃないか？」
自宅から15分程歩いたところに神社があり、それを囲んでいる森に訪れた。
「ふむ、これはいけますね、わちきに任せてくだされ」
出発前にあれこれと準備してた小傘はそれをまとめたリュックから様々な道具を取り出した。
「ん？何か作るのか？」
小傘はリュックから取り出したロープを周りの竹に何かメモのよ

うなものを見ながら結び始めた。
「はい、軽い罠を…」
はえ～器用だな…
「俺にもなんか手伝えることあるか？　」
「そうですね…旦那様は鍋でお湯を炊いてくださいな」
小傘はリュックから水が2リットル入ったペットボトルと鍋、そしてマッチを取り出した。
「なるほど、一度俺の家に戻っていろんな道具をかき集めたのは色々準備が必要だったからか…で、お湯は何に使うんだ？」
「油揚げを茹でてもらいます。」
なるほど、てかよくもまぁ自分からここまで考えたもんだ感心するな
俺の自宅で火をつけれるモノだとか長くて丈夫なモノだとか色々用意させられて大変だったが、良い罠が作れそうだ。
「ふわっ!?」
小傘の頭を撫でてやることにした。
「え、虫ですか!?虫がいました!?」
俺はただにっこりと微笑むだけである。
「な、なんですかぁ…？　ま、まぁいいや竹を切らなきゃ」
と、ノコギリを取り出しギコギコと刃を竹に入れ始めた。
「……ぬぅ…」
湯を沸かしながら俺はその様子を見ている。
素人の俺でも見てわかる、刃の入れ方が上手い。
小傘は竹をスムーズにバッサリと切り倒してみせた。
「小傘って、大工か何かやってたのか？」
ふぃ～と額の朝を拭ったあと
「うーん、これと言って本職はないんですけど…鍛冶屋とか…ベビーシッターとか趣味でやってましたよ。」
え、すげぇ
だから刃物の扱い上手いのかな。
「鍛冶屋とベビーシッターってどう結びつくんだ…？　」

「うーん、ベビーシッターは普通に小さい子供が好きでやってたんですけど、鍛冶屋はなんか…筋が合ったというか…何というか…」
なるほど、才能というやつか。
「よし、良い感じです。」
そう言ってる間に切った竹を上手く加工して縄と結びつけて罠のようなモノを作り上げていた。
「すげぇな、めちゃくちゃ良い出来なんじゃないかコレ」
「ふふん、わちきにかかればこんぐらい屁でもないですよ」
小傘は腕を組みながらえっへんと威張って見せる。
「お、油揚げ良い感じかな。」
茹でた油揚げを箸でつまみ皿に盛ったものを作られた罠のかかる場所に側に置いた。
「なるほど、油揚げを食べようと近寄ると脚が縄にかかりてこの原理（？）的なアレで吊り上げられるって訳か…？　」
「まぁそんなところですね！」
よし、時間をおいてまた来てみよう。
小傘の意外な特技が見れて中々楽しい体験であった。

第１４話～渋沢さんに恩返しするぞ大作戦⑤～

あれから2時間ほど経過しただろうか、狐を捕らえるように仕掛けた罠を確認しようと俺と小傘は例の森林に戻ることにした。
そして、なんと掛かっていたのだ！
そう、掛かっていたのだ…いたのだが…
「……」
掛かっているソレをただ茫然と眺める小傘と俺
「…小傘、アレってもしかして…」
「間違いありませんね、アレです。」
掛かっていたのは狐ではなかった。しかし、ハズレと言うわけではないのだ。
灰色で袖が破けた着物、そして足には古びた下駄、頭にボロボロの藁製の紐付きの傘を被っていた。
「おいゴラァ…てめぇらかぁこんなちんけな罠作りやがった輩は？」
そう言いながら罠に掛かったソレはこちらをギロリと睨みつけてくる。
「あの～、こんな状況で聞くのもあれなんですが～その…」
「あぁん？なんだよ」
「もしかして、雨降り小僧さんでしょうか？」
「ったりめぇだろうが！天下の雨降り小僧と言えばこの俺以外に誰がいるってんだぁ!!」
うわぁ…すっげぇ気性の荒い雨降り小僧だ…
「まさか、狐ではなく目的としているコチラが先に掛かるとは…」
「け、計画通りですね！」
小傘は舌を出しながら親指を立てる
まぁ、どうあれ手間が省けたのは確かだ。
「あの～、罠に掛けてしまったことに関しては謝ります、ごめんなさい」
「もっと気持ち込めろよ!!そこでああいいですよ、なんて言うと思ったかクソ餓鬼が!!」

まずい、ここで怒らせ続けるとお願い出来なくなる…
「うぅ…申し訳ございませんでした…」
俺は念入りに深々と頭を下げた。
それを真似るように小傘も頭を下げた。
「全く…こんな森の中で妙に香ばしくていい匂いがすると思って来てみりゃあ美味そうなもんが転がってるじゃねぇか…腹が減ってたんで食べようと近寄ったら…よくもやってくれたなぁてめぇら!!」
動物ならまだしも、ちゃんと言葉も話せる奴があの罠に掛かるとは…
「今、降すのでジッとしてて下さい」
「おうおう、早くしやがれってんだ！」

俺は気性の荒い雨降り小僧を罠から解放した。
「で、なんだ…俺に用があってあんな罠を仕掛けたんだろう？」
「え？何故そう思ったんですか？」
「俺は大妖怪だからな、よっぽどすげぇ罠じゃねぇと引っかからねぇんだ。しかし、そんな俺を引っ掛けた、つまり俺を捕らえるための罠って訳だ。」
「その理屈だと他の妖怪でも掛かるのでは…」
「うるせぇ！俺の理屈にケチつけんのか!!」
やべぇ…凄く面倒くさい
「さ、流石ですね、その通りです。貴方様に用がある為、罠を仕掛けさせて頂きました!!」
「その言葉遣いもやめろ！気持ち悪い!!」
ガッ…こ、こいつぅ…
「さっきから文句ばっかり！なによ！旦那様が頑張ってるのに！」
「こ、小傘？」
と、小傘は頬を膨らませて飛び出してきた。
「あぁ？なんだよ、俺が間違ってんのか!?」
「そうよ！アンタが間違ってるだけだもん！」
小傘はカンカンに怒っている。

「なんだと…ん？お前…」
　雨降り小僧は目を細めて小傘をよく見る。
「そうか…傘化けか…けっ！お前みたいな下等妖怪にあれこれ言われる筋合いはねぇよ!!」
「かっちーん！アンタだって凄い妖怪じゃないでしょ!!鬼とか龍でもない癖に!!」
ザワ…
　…!?
　なんだ…一瞬寒気が…
　辺りが暗くなり、鳥が飛び散っていく。
「俺が…凄くない…だと？　」
　ポツン…ポツン…
「…雨だ。」
　雨降り小僧の力が発動しているのか、しかしこの雰囲気…何か…
「この妖力…旦那様!!」
「え？」
「只者じゃないです!!この雨降り小僧!!」
　ザーッ
「ぐっ…!?　」
　唐突に雨が強くなった。
「俺を見縊ったな…唐傘如きが…」
　一層雨が強くなる
「まだ雨が強くなるのか…!?　」
　身体全身に衝撃が来るほどの勢いで雨が降っている、これ以上雨が強くなると言うなら身体が保たないかもしれない…
「くぅ…このぉ！」
　小傘は雨を防ぐ為に上にさしていた傘を雨降り小僧の方に向け
「くらえぇぇ!!」
　数日前の朝に小傘が放った例の弾幕が放たれた。
「ぐおっ!?」
　小傘の放った弾幕は雨降り小僧に直撃した。

「こ、この野郎…痛えじゃねぇか…」
飛び散った砂埃の中から雨降り小僧は姿を現す。
すぐさま雨降り小僧は構え始めた。
「雨降り小僧はなぁ…長年生きると雨を降らすだけじゃなく…自在に操ることが出来るんだよ!!」
森を囲むように降っていた大雨は、範囲を狭め
「……ぬぅ…!!?」
小傘に対して集中豪雨がきている。
「小傘!!」
あまりの衝撃に小傘は膝をつき、身体が倒れそうになってしまう。
「どうだ…これが雨降り小僧の真の力だ…」
余程の大技なのか疲れている様子が見える。
「やめろぉ!!」
「うお!?」
奴が小傘の方に集中している隙に俺は横から飛び掛かった。
「離せこの!!」
「嫌だね!小傘を豪雨から解放してくれるまで離すもんか!!」
俺は必死に離れまいと抵抗する。
「くそぉ!何故、人間であるお前が妖怪なんかを!」
「人間が妖怪を助けたいと思っちゃいけないのか!!そんな理由があるのか!!」
「くぅぅ…おらぁぁ!!」
俺は払い退けられてしまった。
「ぐっ!…」
奴は息を切らしながらも立ち上がり倒れた俺を見下す。
「ちっ…俺はなぁ…人間が大の苦手なんだよ!静かに暮らしてぇのに勝手に木とか伐採して変に建物増やして、俺や俺以外の妖怪の住処どんどん減らして…」
そうか…だから人間である俺にめっぽう当たりが強かったのか…
「そ、そうか…そうだよな…あんた達妖怪が減ってるのは俺たちのせいだもんな…」

「なに知った風な口ほざいてんだよ!!今更同情でもする気か!!?」
横たわった俺の腹を蹴る。
「ごふっ!!」
何回も…何回も…
「ごはっ…げふっ！」
「お前らはいいよなぁ…数増え続けて、楽しく暮らして、俺達の気持ち理解したことあんのか…？」
蹴り続けることをやめない。
「や…やめて…よ…」
豪雨に打たれながらも小傘は声を必死に張っている。
「旦那様に八つ当たりしないで…」
「あぁ…？そもそもお前もだ、なんで人間の味方なんてする!?傘化けって言っちゃあ人間に忘れられた傘の成りの果てって言うじゃねぇか…」
「そうだよ…私だって置き忘れられた恨みで人を驚かすけどさ…でもね…人間って…悪い人だけじゃないんだよ…？」
こ、小傘…
「子供の面倒を見てたらありがとうって言ってくれる人がいたり…私みたいな妖怪を家に泊めてくれる人がいたり…喧嘩しても必死に探してくれる人がいたり…良い人間も沢山いるんだよ!!」
「黙れ!!!!」
小傘に対して降り注ぐ雨が一層強くなる。
「ぐぅぅ…!!!」
小傘ぁぁ…
「助けてくれ…頼む…」
「なんだ、命乞いか…けっ、やっと分かったか妖怪の偉大さが…」
「違う…俺はどうでも良い…あの妖怪だけは…小傘だけは助けてやってくれ…頼む…」
「お前…何故そこまで妖怪に身を張れる…」
「お願い…だ…」
「!?…お前…泣いてるのか…分からねぇ…何故だ…分かり合えないは

ずなのに…」
「妖怪とか人間とか…そんな区別なんて必要ない…その存在を助けたいかは自分の勝手だろ…」
「……そんな目で俺を見るな…」
「…たの…む…よ…」
「くっ……ちくしょうが!!」
その瞬間小傘に降り注いでいた豪雨は止んだ。
「あ…りが…とう…」
俺の意識はそこで途切れた。